

[報告]

第8回国際ブルーノ・シュルツ・フェスティバル

——ブルーノ・シュルツ受容の現在——

加藤 有子

1.

2018年6月、一週間にわたって、ウクライナ西部の小都市ドロホビチで国際ブルーノ・シュルツ・フェスティバルが開かれた。2004年に始まり、隔年で開かれるこのフェスティバルも早くも8回目を迎える。ポーランドやウクライナをはじめ、世界各地から、ブルーノ・シュルツの研究者や翻訳者、愛好家が集う。ここでは英語ではなく、ポーランド語とウクライナ語が主言語というのも、英語一辺倒の近年、小気味よく心地よい。「シュルツは人をつなぐ」とは、シュルツに関わる人たちが口癖のように交わす言葉だ。シュルツを縁に、国や使用言語を越えて人が出会い、企画が生まれ、そのつながりが広がっていく。

期間中は、二日にわたるシュルツ学会のほか、連日、朝から夜遅くまで、演劇、コンサート、展覧会、翻訳者や作家、詩人のプレゼンテーションなど、多彩な催しが行われる。ドロホビチにはホテルが一軒、ほかには昔ながらの学生寮があるだけだ。参加者は近郊の温泉保養地トゥルスカヴィエツのホテルに分散して泊まる。トゥルスカヴィエツにはシュルツもしばしば出かけ、小説に描いた。短編「秋」に出てくるアダム・ミツキエヴィチの胸像は、いまも公園に残る。フェスティバル期間中は毎朝、大型バスが各ホテルを回って参加者を乗せてドロホビチに向かう。夜には最終プログラム終了に合わせて同じバスがやってきて、疲労と興奮と時にアルコールに上気した参加者を乗せて帰路につく。近年、トゥルスカヴィエツはポーランドやウクライナの観光客向けの整備が進み、バーやレストランが増えた。参加者たちは戻ってから町に繰りだし、シュルツ談義に興じる。初期は、日々、現場でプログラムが変わるカオスが定番であったフェスティバルも、最近はいよいよ落ち着いてきた。参加メンバーも歳月とともに少しずつ変わっている。それでも、シュルツ愛好者が世界中から集まり、ひたすらシュルツを語り合う文字通りに祝祭的な一週間であることは変わらない。

今回で五回目の参加となる筆者は、初めて、ほぼ全日程に参加した。二日目には、旧ポーランド領のウクライナ国境地帯ストリィ、ボレホフ、ホシュフにユダヤ文化、ポーランド文化の痕跡をたどる日帰りツアーが企画された。荒れ果てたユダヤ人墓地や廃墟となったシナゴークなどを見学したのち、湖のほとりの最新の滞在型保養施設

のホールを借りて、翻訳者パネルが開かれた。筆者もデボラ・フォーゲルの翻訳パネルに、『アカシアは花咲く』の日本語訳者として参加した。イディッシュ語詩人でポーランド語作家のフォーゲルは、ブルーノ・シュルツの元恋人であり、シュルツの短編はフォーゲルとの文通から生まれた。フォーゲルのイディッシュ語作品（詩集二冊と『アカシアは花咲く』）をウクライナ語に訳したゲルマニストのユルコ・プロハシコ（Jurko Prochaško）とともに、フォーゲルについて語り、それぞれの翻訳言語で朗読した。心理学者でもあるというプロハシコは、フォーゲルの作品について、どれほど言葉を重ねても、実に至らず空虚さにしかたどり着かない、と表現した。フォーゲル散文の基調は諦念である。採用したモンタージュという手法も、一見、直接の関連性がないものに共通性を認め、それを並べて、その共通のものを浮かび上がらせる手法であり、プロハシコの感想に通じているように思えた。

これまでのフェスティバルでは、シュルツ作品の翻訳者が集まることの多かった翻訳パネルは、今回はシュルツの世界の広がりを感じさせるものになった。シュルツのグルジア語翻訳者のほか、フォーゲルの訳者、シュルツ作品のカバラー解釈の研究者である故ヴワディスワフ・パナス（Władysław Panas）教授の書籍のドイツ語訳者たち、そして、シュルツの新しい伝記を執筆中で、2012年のフェスティバルでシュルツをテーマに参加型アートプロジェクトを行ったアンナ・カシュバ＝デンプスカ（Anna Kaszuba-Dębska）のプレゼンテーションが行われた。

すでに丹念な資料調査をもとに、フォーゲルも含むシュルツに関わる女性たちの伝記を『女性たちとシュルツ』（*Kobiety i Schulz*）にまとめたカシュバ＝デンプスカは、クラクフのフェリツィヤネク通りに2002年から続くカフェ、カフェ・シャフェ（Café Szafe）のオーナーでもある。同じ通りにあって、すでに伝説的な存在となっている英語の古本屋マソリット（Massolitは小説『巨匠とマルガリータ』より。元店員がマソリットにヒントを得たポーランド語本屋ブフブント（Buchbund）をベルリンに作ったほか、ブダペストにもマソリットが作られ、中欧の文化シーンにも影響を与えている）の創設者は、現在、シカゴ・イリノイ大学で教鞭をとるシュルツ研究者のカレン・アンダーヒル（Karen Underhill）である。筆者はクラクフ留学時代の初期、マソリットの上階にアパートを借りていて、第二回シュルツ・フェスティバルで彼女に出会った。当時、マソリットの上階には、ブルーノ・ヤシェンスキの小説『パリを焼く』やイエジ・フィツォフスキ（Jerzy Ficowski）の詩の英訳者であるカナダ出身のソレン・ゲイジャー（Soren Geiger）も住んでいた（出版社はともにプラハのツウィステット・スプーン）。シュルツを起点に、さまざまな関係が広がった。

ブルーノ・フェスティバルの核が、二日間にわたって行われるシュルツ国際学会である。隔年で研究発表を行うのは研究者にとっても簡単ではないが、ポーランド20世紀文学の名だたる研究者が集まり、国際的な情報交換や交流の場になっている。ウ

クライナの学者の参加も年々増え、ウクライナ語のパートとポーランド語のパートに分かれてセッションが組まれることもある。ポーランド語使用者が圧倒的多数であったシュルツ研究に、ウクライナや地元ドロホビチの研究者が参入した成果は大きい。特に、これまでほぼ白紙であったソ連占領時代のシュルツの動きが見えてきた。ソ連のウクライナ語新聞に画家として、体制翼賛的イラストや、イワン・フランコ作品への挿絵を寄せていたことが明らかになった。ポーランド、ユダヤ、オーストリア、ウクライナの多文化的背景と、二つの大戦をまたぐ時間を生きたシュルツの活動がより立体的に、言語や国の枠を越えて複合的に見えてきた。これを明らかにしたウクライナのウェシヤ・ホミチ (Lesia Chomyc) の論文は、シュルツの挿絵とともに日本語翻訳出版の予定である。

両大戦間期のポーランドの作家は、基本的に二言語以上の複数言語使用者であった。ポーランド文学の枠に閉ざさず、ポーランド語以外の言語に一次資料調査を広げることで、より広範にわたったその活動が明らかになるケースが相次いでいる。2000年代に入って、シュルツの元恋人から、アメリカのイディッシュ語雑誌にも寄稿したモダニスト詩人として再発見されたデボラ・フォーゲルもそうだ。東欧言語の作家は、決して一つのマイナー言語に閉ざされたローカルな存在ではなかった。

シュルツは現代作家にもファンが多い。今回のフェスティバルには、ポーランドからはオルガ・トカルチュク (Olga Tokarczuk)、パヴェウ・ヒュレ (Paweł Huelle)、アダム・ヴィーダマン (Adam Wiedemann) ら、名だたる作家がやってきて、それぞれの作品の紹介や朗読を行った。トカルチュクは文学のみならず、現在のポーランドの政治状況にも踏み込み、鋭く批判し、社会の代弁者としての知識人の姿を見た思いだ。こうした文学イベントの会場となったドロホビチ市図書館は、ドイツ占領時代にシュルツが蔵書整理の仕事に就いた場所である。フェスティバル期間中は、シュルツの生が時間を越えて目の前の現実に重なる。

ウクライナからも作家や翻訳者が招かれた。フェスティバルの常連は、作家のユリイ・アンドロホヴィチ (Jurij Andruchowycz) である。彼は演劇的要素や映像を交えて自作を朗読し、時にバンドを率いて歌い、圧巻のパフォーマンスを毎回披露している。

演劇やコンサートの会場となるのは、ドロホビチ市の劇場だ。シュルツ・フェスティバルに長年携わるうち、劇場の支配人もシュルツの世界に感化されつつあるようだ。劇場には中庭があり、それをさらに奥に進むと、裏庭に出る。劇場支配人はそこに、カラフルなペンキで塗られた鳥の大きなケージを並べ、孔雀をはじめ、きれいなトサカの白い鳥など、鳥を飼い始めたのだ。シュルツの短編「鳥」では、主人公の父が世界各地から鳥の有精卵を集め、孵化させて色とりどりの鳥で屋根裏部屋をいっぱいにする。その父さながら、鳥の天国が作られている。筆者のウクライナ語能力の欠如も大きいだろうが、非論理的な出来事に出くわすのもドロホビチに特有の「現実」だ。シュ

ルツが書き留めた風、光、空気や秩序が、今もまだドロホビチに息づいている。現実と物語世界、シュルツの生きた時空と現実が混じりあう。

一週間のフェスティバルの最後は、参加者による夜の松明行進だ。暗闇のなか、松明を掲げ、シュルツの住居、射殺現場、短編「春」のヴィアンカの住む館のモデルとされる現在のドロホビチ博物館など、ゆかりの場所に移動しては、選ばれし参加者が自身の言語でシュルツの短編の一節を朗読する。私も日本語で朗読した。さまざまな言語のなかで、チェコ語の朗読が良かった。ポーランド語と似ていて、内容は推測できるが、響きとメロディが違い、夜の木々のざわめきや参加者のささやきにも吸収されずに風に乗った。

2.

シュルツはドロホビチに生まれ、ドロホビチで執筆し、小説の舞台となる匿名の町はドロホビチがモデルだ。しかし、そのドロホビチでシュルツは長らく忘れられていた。

今回、ドロホビチの町の観光客向けの整備が目をつけた。その一つの目玉がシュルツだ。市庁舎に作られた観光案内所には、英語、ウクライナ語、ポーランド語でシュルツゆかりの場所を徴づけたドロホビチのシュルツ・マップが無料で配布されていた。戦前、戦後と住民構成も変わり、通りの名前も変わったドロホビチで、シュルツゆかりの場所を探すにはこうした地図が必須だ。シュルツ関連の書籍やポストカードのほか、塩の採掘で有名だったことから、お土産用に包んだ小さな塩の塊も、ドロホビチの町の紋章を入れて販売されていた。

1892年、シュルツがユダヤ人布地商の次男として生まれたとき、ポーランドはまだ三国分割下にあり、ドロホビチはオーストリア領ガリツィアに属した。第一次世界大戦中、戦火を逃れてウィーンに疎開したシュルツは、両大戦間期、独立ポーランド領となったドロホビチに戻り、画家として活動を始め、のちにギムナジウムの美術教師をしながら、執筆を始めた。第二次世界大戦勃発後、ドロホビチはソ連邦ウクライナ領となり、その後、ナチス・ドイツ占領下に入り、1942年11月19日にシュルツは路上でSS将校に射殺された。射殺現場には、2006年の第二回シュルツ・フェスティバルの際、追悼プレートが埋め込まれた。

戦後、ソ連ウクライナ領となったドロホビチは、ウクライナ語使用のウクライナ住民が圧倒的多数を占める。ポーランドとの自由な往来もままならない頃から、シュルツの資料と消息を探し始め、のちにそれらを書簡集と伝記として発表し、シュルツ研究の基礎を築いたのがイエジ・フィツォフスキである。自身が詩人であり、ポーランドのロマ研究でも知られる。日本でも公開された映画『パパーシャの黒い瞳』で、ロマの詩人パパーシャと交流する若きポーランド詩人がこのフィツォフスキである。ブ

ルーノ・シュルツの訳者工藤幸雄に、シュルツのクリシェ＝ヴェール作品「獣たち」(現在、多摩美術大学所蔵)を送った人物でもある。2016年のフェスティバルでは、2006年に亡くなったフィツォフスキをめぐるパネルも開かれた。

シュルツが忘れ去られたドロホビチにおいて、シュルツを記念する動きを立ち上げ、フェスティバルの端緒を開いた一人が、ドロホビチ教育大学ポーランド学術情報センターのヴェラ・メニョク (Wiera Meniok) だ。彼女自身がシュルツ研究で博士号を取ったドロホビチの研究者でもある。筆者は2000年頃、シュルツの画業の先駆的研究者であったルブリン・カトリック大学教授マウゴジャータ・キトフスカ＝ウィシヤク (Małgorzata Kitowska-Lysiak) を訪ねた際、ドロホビチでシュルツの記念拠点を作る相談にきた若きメニョク夫妻と同席した。当時は私のポーランド語は拙く、会話のほとんどについていけなかったが、二人の表情は暗く、状況が楽観できないことだけは理解できた。その夫イゴル (Igor Meniok) は第一回フェスティバル開催後の2005年に32歳にして亡くなり、ポーランド学術情報センターはイゴル・メニョク記念と冠されている。ドロホビチのシュルツの記憶は、時折、外部からやって来るだけの人間には保つことはできない。地元の二人の情熱とエネルギーによって、ドロホビチにシュルツ記念の種が撒かれ、育てられたと言っても過言ではない。

ドロホビチのシュルツの記憶の守り手には、その教え子であったアルフレート・シュライエル (Alfred Schreyer) も忘れられない。ユダヤ系のシュライエルは戦争を生き延び、戦後もドロホビチに残り、シュルツの記憶の語り部となって、ドロホビチを訪れる人を案内しながらその記憶の旅に導いた。2015年に92歳で亡くなるまで、毎回のフェスティバルに足を運び、参加者と歓談し、バイオリン奏者として、歌手として、自身のバンドを率いて両大戦間期のポーランド語やイディッシュ語の歌、ウクライナ語の歌を朗々と歌った。ルヴフこそが我が都、と歌う両大戦間期の代表的なポーランド語の歌謡曲「ただルヴフだけ！」 (“Tylko we Lwowie!”) を歌う姿はその歌詞とともに、シュライエルその人の生き方に重なり、記憶に残る。

現在、かつてシュルツが勤務したギムナジウムはドロホビチ教育大学となり、シュルツが使った図工準備室の小さな一室はささやかなシュルツ博物館 (シュルツの部屋とも呼ばれる) となった。そこには、工藤久代がシュライエルに宛てた日本語の手紙が展示されている。ドロホビチ訪問時のお礼の手紙で、夫の工藤幸雄のポーランド語訳が添えられている。

戦後、アルトゥル・サンダウエル (Artur Sandauer) とイエジ・フィツォフスキ、そして体制転換期ころからはイエジ・ヤジェンプスキ (Jerzy Jarzębski) が加わり、シュルツ研究を牽引した。1998年に出た工藤幸雄編訳『ブルーノ・シュルツ全集』の解説には、この頃までの研究状況に関する情報が非常に正確に盛り込まれている。

2000年代に入ると、前述のキトフスカ＝ウィシヤク教授とヴウァディスワフ・パ

ナス教授の二人のシュルツ研究者が揃うルブリン・カトリック大学が、シュルツ関連行事のひとつの中心地となった。ポーランド東部にある都市ルブリンは、地理的にもドロホビチに近い。現在、国際シュルツ・フェスティバルは、ドロホビチのイゴル・メニョク記念ポーランド学術情報センターと、ルブリンを拠点とするシュルツ・フェスティバル協会によって運営されている。彼らは毎年11月19日のシュルツの命日には、ドロホビチの射殺現場で追悼式典を運営し、ユダヤ教、合同教会、カトリックの聖職者がそれぞれの祈禱を唱える。

3.

2004年にEUに加盟したポーランドでは、急激にインフラ整備が進み、町の姿が変わった。それに比べると、ウクライナのリヴィウやドロホビチは時代の流れから取り残されたかのように見えていた。しかし、ここ数年、町は急速に変化している。かつてのドロホビチでは、遅くまで開いているレストランもなく、外に出れば、街灯も少なく、短編「七月の夜」さながら、圧倒するような漆黒の夜の闇が広がった。現在は、町の中心部となる広場に新しいカフェが立ち並ぶ。

ウクライナ・ポーランド国境地帯で最大のシナゴグながら、屋根が抜け、窓が割れ、荒れ果てた状態で、鳥が中でさえずっていたシナゴグも様変わりした。2008年に屋根が修復されてから、展覧会やパフォーマンスの会場としてフェスティバル期間中だけ、使われていた。そのシナゴグも、ドロホビチゆかりの海外在住の人物の篤志により、2013年から修復工事が行われ、2018年に完成した。煉瓦がむき出しになり、風雨にさらされ朽ちていた外壁はペパーミントグリーンに塗られ、内部は青と黄を基調とした色に塗り替えられた。シナゴグの見違えるほどの変貌は、時間の経過がもたらす町の変化の象徴でもある。

中欧の町の例にもれず、ドロホビチは市庁舎の建つ広場から通りが放射線状に郊外に向かって伸びていく。広場から数分歩けばシュルツの執筆した家があり、短編に出てくる薬局や通りがある。しかし、シュルツが自然の豊かな情景とともに描き出した物語世界を、現実の風景に読み取り、重ねることができるのも、それほど長くはないのかもしれない。現在、筆者は、近年新たに発見されたシュルツのエッセイ（アール・ヌーヴォーのユダヤ人画家リリエンの美術やシオニズムに言及するもの）を納めたシュルツ関連の書籍を日本語で出版準備中である。そこには、シュルツの軌跡がまだ色濃く残る町ドロホビチを回るためのシュルツ・マップも入れる予定だ。

4.

2005年以降、イゴル・メニョク、パナス、フィツォフスキ、工藤幸雄、キトフスカ＝ウィジャク、そしてシュライエルと、シュルツ研究の創始者たちが次々と世を去った。シュ

ルツの受容史そのものである国際シュルツ・フェスティバルは、彼らの仕事を受け継ぐかたちで続いている。

2017年には、グダンスク大学のスタニスワフ・ロシェク (Stanisław Rosiek) 教授のもと、ウェブサイト「ポータル・シュルツ」(<http://www.schulzforum.pl/pl/>) のプロジェクトが稼働し、日々、内容が付け加えられている。シュルツの生涯を判明している限り一日単位でたどる年表とそのソースとなる文献の引用、関連の人物や場所に関する事項の事典、さらにシュルツに関する資料のデジタル・アーカイヴも兼ねている。現在はポーランド語だけだが、英語、ウクライナ語版も予定されているようだ。ロシェクはグダンスクの人文系出版社〈言葉／イメージ 領土〉(słowo/obraz terytoria) の創設者であり、現在、全九巻のシュルツ選集を刊行中である。2012年からは、ポーランド語のシュルツ研究誌『シュルツ・フォーラム』(*Schulz/Forum*) も発行している。同誌はウェブサイト (academia.edu) など、ウェブ上でも無料で公開されており、最新号は11号になった。シュルツ・フェスティバルからの縁で、筆者も編集委員に名を連ねている。もう一つ、長くシュルツ関連のあらゆる情報をまとめているのが、ベオグラード在住ブランイスワヴァ・ストヤノヴィチ (Blanislava Stojanović) によるシュルツ・サイト (www.brunoschulz.org) である。現在は、フェイスブックにもその情報発信の場を移行しつつある。

5.

「法と正義」政権のポーランドでは、フェスティバルの強力な後援者であった書籍協会 (読書の普及とポーランド文学の海外におけるプロモーションを担う文科省管轄下の機関) のディレクター、グジェゴシ・ガウデン (Grzegorz Gauden) が2016年のフェスティバルを前に突然解任され、スタッフの入れ替えも起きた。政権の意向と思われ、トカルチュク、ヒュレ、作家のステファン・フフィン (Stefan Chwin)、詩人のアダム・ザガイェフスキ (Adam Zagajewski)、若手作家のドロタ・マスウォフスカ (Dorota Masłowska) ら、ポーランドの代表的作家たちが文部大臣宛に公開で反対声明を出した。フェスティバルの開催も心配されていたが、2016年、2018年とひとまず滞りなく行われ、次は2020年が予定されている。ガウデンもフェスティバルには個人的に参加している。

国際シュルツ・フェスティバルの基本的方針は、戦前のドロホビチの多文化性を生きたシュルツを、一つの国や文化に還元したり、閉ざしたりすることなく、文化的混交性のなかに捉え、開くものだ。主催者のこの理念が変わることがない限り、世界から人は集まり、国際フェスティバルであり続けるだろう。この基本的理解とシュルツ好きを共有する参加者たちとドロホビチで過ごす時間は、狭量なナショナリズムが露骨に復古主義的に世界中で顕在化し、政権による文化、学問への介入が国を問わずさまざまな場面で目につくようになるなか、心地よく、心強いものだった。